

21/3/25 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 石垣・埋蔵文化財部会（第41回）

終了後の記者会見

名古屋市民オンブズマンによる半自動文字起こしアプリによる文字起こし

朝日新聞：すいません。記者クラブの幹事社の朝日新聞の関と申しますけれども。お疲れ様でした。ちょっとこちらも時間がなくて、端的に行きたいんですけども。今日最大の関心はやっぱり文化庁の指摘事項への対応へのご判断だと思ったんですけども、まずその評価から座長最初よろしいでしょうか。

北垣：あのこうしてですね、記者会見という形でやっていただくのは最近なかったんですね。それを一言で申しますと、昨年来のですね新型コロナ。それに伴ってですね、大変厳しい環境下であって、そういうような中であって石垣部会を開催できないと。こういう事態が起こったと。ところがですね、一方今現在発掘現場でいろいろ調査をお願いして、文化財担当者、さらには石組の棟梁、またそれに係わる皆さん方ですね。

こういう方々は、実はこの部会からですね、発掘調査こういうところをこうしてほしいというようなことに対してですね、真剣に取り組んでいただいているわけですね。

そしてまあちょっとこのところ暖かくなりましたけれど、一番厳しい時、もう本当にもう寒風の吹きすさぶような中でですね、こういうような中では仕事やっていただいたと。そしてやられて、その後、とにかくメールか何かでですね報告をいただくわけですから、まあ大変な作業をなさっておられたということが一つまずあるわけですね。

我々、部会側としては当然参加したいのだけれど、コロナというようなこともあってですね、なかなか現場に出られない。そういう状態の中で、厚かましいですけどね。

赤羽先生など地元いらっしゃる委員の方々をお願いしたり、それだけでやっぱりまずいということで、それぞれ遠方からですね宮武先生などだいぶん来てくださったんじゃないかと思うんですよね。こういうようなことがあってですね、それぞれ現場の方へやってくる。

そして現場の方では、担当者からはですね、いろいろな課題、質問、そういうことに対して、それなりに受け答えをしていただいて、必要なことはお返りするわけですけど、ちょっとそれはまずいなというようなあたりの指摘もまたしていただく。

こういうような状況が恐らく今日ですね、こうして資料集ができて、そしてその資料集ができて上がっていくその経過というのは私ちょっと考えておったんですけど、こういうようななかなか大変なことを皆さんが経験して、今日までようやく今日のようなまとまりのあるですね状況にやっともってこれた、いけたということですかね。

それだけに我々としてはですね、現場とそれから部会とがですね、出来上がっていく趣旨の部分共有しているというか、こういう関係が強まったように思いますね、今思いますと。だけど、そうなんだけど、やはりなかなかこういった今日の議論にもありますようにですね、一つ一つが直接現場を見たり、スポクラ感じたり、それからやっぱり野外の場所でないときかないような、いろんな要素が石垣の修復工事というのには絡んできます。

だからそれぞれがですね、もう本当にもう、なんていうんですかね、この間があれ確か15日あったときなんかはですね、きんばれやろうという話になって、そんなことをやったら午前中に来てもらえる先生にお願いしたいなっていうことで。

10時までやってですね、6時半過ぎとったかもしれない。6時半ぐらいまでやっとなんかかもしれんですね。もう昼飯も抜いて現場におりましたから。

だから今日のお話が、委員の先生方は気楽にこうでああでというて今日の話も聞こえてますけどね、実際はそういうような現場で行ってのやりとりのね、その積み重ねが、結果的には今日のような資料に一つ一つ結実していったと。こういうことじゃないかと私は思ってますね。

その中でですね、やはりこういう調査の一つのあるべき方針とかですね、あるべき方向性とか、こういうのがありますから、それが現場でやっておられることとずれてくることはやっぱりあるわけですね。

そういうことになると、当然ちょっと不足しておるなあ、もうちょっともう一方やってほしいなあということになると、もうきつくね、それは現場に対して言ってしまうなあかと。このようなこともしょっちゅうあります。

そういうような状況の中でですね、その一つ一つ今日までですね、進めて、これたんかなというようなことを、私今率直に感じるんですね。

もうちょっと言い足りないこともあるんでしょうけれど、とりあえず、私はそういうような思いで今日の会をですね、一応終わらしてもらったということだと思います。あとは先生方の色々ご意見がございましてから二つ三つどうぞお願いします。

朝日新聞： こちらから一問だけあるんですけど、千田先生がおそらく評価されたりとか、もう文化財遺構を毀損しないという整備方針を明記されたことだとおっしゃったと思うんですけども、この辺り詳しく。これまでと名古屋市の姿勢が変わったという考えでしょうか。

宮武： ちょっと今、質問趣旨がよくわからなかった。

文化庁に対する課題が出てね、それに対しての回答でどうなのかっていうところの延長で言えば、文化庁が出された様々な指摘の段階での情報量と、今とでは全然違うんですよ。

ていうのはその後、細密な調査をして、新しい知見が出てきて、さらには気づかなかったダメージも出てきて、そういうもの一つ一つ課題は課題として抽出して、解決できる方策で見えるものは、これは出して、さらに追加で調査しないとよくわからない部分は出てきた。これ当然のことでしょう。ですから、文化庁側としてさっき説明もあったんですけども、事前の説明協議を行ったのかな、ここまで詳しいものはいらなくて言われたということは、その全然足りてないんだ。当然のことながら進行しながら、新しいものが見つかっていきますから。

ですから、名古屋市側の姿勢が変わった云々ということではなくて、対応する調査の質も量も増えていってるわけですから、それに対して、さらに来年度以降も必要な調査を続けていきますと。で答えられる解決策ですとか方向策については、今回これで文化庁側には答えられますよと。そういう方針を部会としては、今日の内容で確認できたというふうに理解していただけますけど。

朝日新聞： 各社さん、質問があればどうぞ。

中日新聞： 中日新聞の水越ですけど、先生方概ね文化庁へ答えるということを理解をされたと思うのですけれども、赤羽先生は違うご意見があったようですけど、提出するっていうことに対しては今回賛同されたということでもよろしいのでしょうか。それとも反対なのでしょうか。

赤羽： 石垣部会、石垣埋蔵文化財部会の使命というのは、やっぱりあくまでもやっぱり名古屋城の本質的価値をもっている石垣からの地下遺構をどう保全し、さらに発展、理解をすすめていくかということが、その工程を探るのがやっぱり私達が最大の使命だと思うんですよ。

ですからそういう点では、今回の内堀の調査でせっかく出てきた石列というものの、やっぱり性格とかですね、そういったものがやっぱりもっと調査をして、それを記録するというのはむしろ埋蔵文化財、石垣埋蔵文化財部会の使命に叶ったことである。その点では、今の名古屋市の扱いというのは、ちょっと物足りないなあということで、発言をさせていただいたわけですね。それともう一つはやっぱり、様々なお考えをお持ちだと思うんですけども、天守閣木造復元についても皆さんの意見はやっぱり違うと思うんですよ。

それについては私たちは今まで一度も議論したことはありません。木造天守そのものの是非、個々の皆さんのお考えについては、部会の中では論議したことはございませんし、これからも多分ないと思うんですけども、その点では今日の資料で、文化庁に対する質問の最後に木造復元と、現天守を解体するということと、木造天守の復元という問題について、一応名古屋市の回答でてましたけども、私自身はあれは石垣部会が扱う範疇でないというふうに理解して、私自身は、むしろそれまでの先ほど先生おっしゃったような、文化庁のね、あの質問に埋蔵、石垣埋蔵文化財部会の範囲で答えれることについては、名古屋市の調査に基づいて、それを一応了承したというか、そういうふうに申し上げたつもりです。

記者： 石列部分などの調査がちょっと不十分だったということで、ただ、個人的には回答は時期尚早なのではないかというような感じですかね。

赤羽： そうですね。

宮武： ちょっとね、みんな見たいですよ。できたら下まで全部丸裸にして見たいですよ。しかし堀底も特別史跡、国宝ですから、今回あくまでもあそこの健康診断として行う調査なので、予想外にああいうもの出ちゃったわけですよ。

ですからそこで方針変換して一気に掘っちゃいましょうというのはなかなか話なので、文化庁としても、ちょっとあれはあれで貴重だからと、また仕切り直して考えてくださいということを言われてる部分があるんですよ。

ですから、できたら掘りたい。ただ様々なそのオーソライズが必要ですから、その部分ですよ。

赤羽： 僕はちょっとやっぱり意見が違うんですよ。

やっぱりそういう出てきたものについては、やっぱり先ほど言いましたように、わからないもの、わかった部分とわからない部分ってのはやっぱり明らかにするというのが、当然調査を担当した調査員の通り、その現場に行った私どもがやっぱりそれについて物申すということは当然あっていいことだということだとふうに私は考えております。

それをやっぱり言う、言うことが、むしろ逆にいうと、せっかく名古屋城で調査研究センターというものを作ったことの意味だと僕は思ってるんですよ。

千田： 今日のですね石垣埋蔵文化財部会は、非常に大きな意義があったというふう思っています。長く取材していただいている報道機関の方、あるいは現行名古屋城どんな風になるんだろうかということでその行方を心配してくださっている市民や県民の方も多かったんじゃないかと思うんですけれども、今回の会議で、石垣埋蔵文化財部会としてですね、文化庁から出されていたいろいろな宿題ですね、課題について、とにかく現状、一生懸命ですね先ほど北垣座長からお話ありましたように、名古屋城の調査研究センターが誠実に調査してくださって、その学術的な成果に基づいて、課題にですね、現在答えられるところで明快に答えることができた。

それから当然今赤羽先生からご指摘がありましたように、今の調査は石垣の保存やですね、現状を把握するという事で、特別史跡の発掘の許可を文化庁に得ていたということで、新たに見つかった堀底の石。石列。これは幻の西小天守の基礎の石だと思いますが、これについて更に解明していくということは、これは赤羽先生だけではなく石垣埋蔵文化財部会の構成員全員が望んでいて、ただそれは特別史跡の中のことですので、それは最終的にどういうふうに、名古屋市が活かしていくのかということの目的を明らかにした上で、文化庁がその調査を今後許可をもらえるかもしれないということであって、そういったことについては今日会議の中で申し上げましたように、将来的な着地点ですね、堀底の石の列がこういうふうにあったんだということ、将来活かしていくよということの、目的が明示されればですね、その目的に、ふさわしい発掘がですね、今後文化庁からも現状変更という形で、許可されるっていうことになっていくだろうと思います。

ですからそういったまだ今後の課題というところではありますが、兎にも角にも、とにかくにもという言い方はあれですね、とにかくって、とにかくって言ってしまった。

すいません、ちょっとそこやり直し。今日の会議でですね、文化庁から課せられていた宿題については、ほぼ完全な形で、名古屋市は文化庁に回答できるということが明確になった。これが明確になったということは、今後ですね、名古屋城の全体の様々な整備計画を文化庁に提出していく。これまでそこがクリアできなかったのも、出せなかったっていうところがあったんですが、その前提条件をクリアされたということが見えてきたと。これは最終的には全体の整備の委員会で承認されないといけませんから、部会のまだ承認を得たっていうことでありますけれども、この一步は極めて大きいっていうことだと思います。

記者： 名古屋市の方は2028年に完成といいますか、工程通りいけば、そこら辺を目安にできるんじゃないかというような新たな工程表を提出してますけれども、今回大きな一步ということで、この通りに今のところ行くのかどうかっていうそこら辺、皆さんどう感じになってるか伺えれば。

宮武： それはやっぱり親委員会の承認もまだですからね。その午後天守部会がありますからお楽しみに。

千田： 聞かれてないこと話そうとしている。あと先ほどの話で、今回改めてですね、名古屋市さんがですね、組織として特別史跡の石垣であったり、あるいは埋蔵文化財、地下遺構をですね、そういったものを保存を徹底した上で、今後の復元や整備を進めていくっていうことを疑念の余地なく明確にされたということもこれも極めて大きいですね。

やはり特別史跡の活用ですね、復元をしたり、整備をしていくというときに、本物の名古屋城を壊して、でなにか整備するっていうのはこれは本末転倒でありますから、そういうことは絶対に名古屋市はしないんだということをですね、こういうふう書類でしっかり記して、文化庁にもそれを宣言するというので、やっぱりもう一つその宿題を単にクリアしたっていうだけではなくて、名古屋市としてはまさにこういう方針で、名古屋城を活かしていくんだっていうことが、今日明確にさせていただいたというのも、これやはり本当に大きなことだったというふうに思います。

宮武： さらに今日議論に出なかったんですけどもね。

文化庁の宿題というふうに言われてますけれども、これはやはりつぼどころを得たっていうことですよ。

つまりまだそれまでに名古屋城の体制面ですとか、それから特別史跡を維持するため調査の考え方っていう部分も全部ひっくるめて、これを補うためにクリアしなさいという課題の内容の方向性が、やっぱりそれが妥当だった。やっていった結果、名古屋市側も自己反省的に

改善すべきところは改善する方向が見えてきて、更に不足するところはこういうところが必要だということも見えてきて、更に調査した結果、堀底から石垣がさらに見つかったと。ですからそういう意味では、与えられた課題というのを単純に宿題を解決するだけっていう問題ではなくて、これからの名古屋城自体の全体のなんていいますかね、より正当な特別史跡の保存と整備に向けての考え直す、そういういい機会が得られたんだという見方も私はできていると思っています。

記者： 今千田先生が「保存した上で、事業を進めていくということを明記されたということは非常に大きい、評価すべき点だ」とおっしゃいましたが、以前、私は当時は担当じゃなかったのですが、部会と市が結構対立するようなものが多かったと思うんですが、これ以前と比べて市の姿勢の変化というものを感じられますでしょうか。

千田： それは本来座長がお答えすべきことだと思いますが、名古屋市もですね、当初から名古屋城壊して何かしようとしておられたわけではないと思うんですが、やはりどういうふうですね、具体的に守っていくかということ、今回ですね、なぜこれだけ明確になったかということ、名古屋市がですね、名古屋城調査研究センターというですね、全国の自治体で組織しておられる中でも最大クラスですね、名古屋城を学術的に調査研究するという組織をしっかりと作られて、その調査が軌道に乗ってきた。具体的な調査成果が次々と計画的に上げてきていただいているので、その成果に基づいて、こういう方針も立てますよってということが、ようやく、ようやくというかその調査研究というのに基づいた上で、ちゃんとこういう形に宣言できるようになってきたということで、やはり当初の段階ではですね、その文化庁から求められていたように、その基本的な調査や研究というのが圧倒的に足りてなかったと。ですからなかなかじゃ守ると言っても何をどう守るのかということですね、今回の今日の資料のように具体的に書けなかったっていうところに、あの課題があったと。今回ですね、こういうふうな形で、きちっとした学術的な成果に基づいてこうします。だからこれを守りますっていうですね、そういうことが言えるようになってきたというのは正に名古屋市がですね、調査研究センターを名古屋城に設置されて、それをしっかりとした調査を重ねてきた成果が表われてきたというそういうことだと思います。ですからこれからはそういう形で非常に良い形で計画進めていただけるというふうに期待をしています。これは私の個人的な見解です。

司会： 他に良かったでしょうか。

西形： 私、ちょっと話の内容変わるんですが、私は実は工学側の人間でございます。我々といたしましては、やっぱり今回の天守のいわゆる木造化ということで、我々の仕事といたしましてやはり、現存する石垣ですね、これをいかに傷つけないか、あるいは影響しない形でこういう工事が達成できるかという、これがもう第一課題でございます。

その中でちょっと会議なんかでもお話していただいたんですが、今回は発泡スチロールというこのものです。本来は盛り土といえ土を入れてしまうんですが、いやそうではない。発泡スチロール。できるだけ軽いもので、石垣、さらには堀底の地盤にもできるだけ影響を与えないものということで、そういう材料で土台を作って、その上に工事用の仮設構造物を作ろうということになりました。

この影響の度合いというのは、これなかなか想定することは難しいんですけども、そこは計算技術、現在ある考えられる中で最も良いだろうという計算技術で計算をした結果、その点は影響は非常に微小であるという結果が出てまいりました。そういう意味で、ここで一つ選択していただいた発泡スチロールを使った工事、いわゆる既存の文化財に対して非常に影響の少ない優しい工法になったんだらうというふうに思っています。

それからあと、やはり工事を行う前にいろんな調査がなされました。

石垣の内部を調べる調査であるとか、堀底を調べる調査、いろんな調査がなされました。実は、私の方の中でやはりその中、石垣のいわゆる状況の調査あるいは維持、維持管理していく中で、この名古屋城での調査というものは、やはりいろんな技術、新しい技術を含めてですね、それを非常に開発していただいたというか、その確実性もある程度確認していただいたのは、非常に成果があったのではないというふうに思っています。

ただ、これからやはり、もし施工に入ることになれば、やはり実際の施工の中では、まだ未知の問題がいろいろ出てくる可能性もございます。

実は石垣というのは工学の石垣というのは、工学の分野ではなかなか扱うのが難しい分野で、この安定性を評価するというのはまだ工学的には未知の領域だと言ってもいいようなところでございます。

そういう意味で、これから実際施工が行われることになれば、やはりいろんな問題が出てきて、あるいはそれがもとで、これからの城郭石垣の維持管理の中で非常に大きな成果が得られる可能性があるんじゃないかというふうには思っております。以上です。

司会： よろしいでしょうか。

ではありがとうございました。